

ういろうり
外郎売り

だいいちだん
第一段

せっしゃおやかた もう おたちあい うち
拙者親方と申すは、御立会の中に、

ごぞん かた
御存じのお方もござりましょうが、

えど た にじゅうりかみがた
お江戸を立って二十里上方、

そうしゅうおだわらいつきまち す
相州小田原一色町をお過ぎなされて、

あおもものちょう のぼ いで
青物町を登りへお出なさるれば、

らんかんばしとらやとうえもん
欄干橋虎屋藤右衛門、

ただいま ていはついた えんさい なの
只今は剃髪致して、円齋と名乗りまする。

がんちょう おおつごもり て い こくすり
元朝より大晦日までお手に入れます此の薬は、

むかしちん くに とうじん ういろう ひと ちょう き
昔陳の国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、

みかど さんだい お
帝へ参内の折から、

こくすり ふ こ お
此の薬を深く籠め置き、

もち とき いちりゅう
用ゆる時は一粒ずつ、

かんむり すま と だ
冠の透き間より取り出す。

よ ^な みかど ^{とうちんこう} たま
依ってその名を 帝 より、透 頂 香と給わる。

すなわ ^{もんじ} ^{いただ} す ^{におい} か ^{もう}
即 ち文字には 頂 き、透く、 香 と書いて、『とうちんこう』と申す。

ただいま ^こ ^{くすりこと} ^{ほか} ^{せじょう} ^{ひろ}
只 今 は此の 薬 殊 の外、世 上 に弘まり、

^{にせかんばん} ^だ
ほうぼうに 偽 看 板 を出だし、

^{おだわら} ^{はいだわら} ^{だわら} ^{すみだわら} ^{もう}
イヤ、小田原の 灰 俵 のさん 俵 の 炭 俵 のと、いろいろに申せども、

^{ひらがな} ^{おやかたえんさい}
平仮名をもって「ういろう」といたしたは、親 方 円 斎 ばかり。

^{たちあい} ^{うち} ^{あたみ} ^{とうのさわ} ^{とうじ} ^で
もしやお立 会 の内 に、熱海^か塔 ノ 沢 へ、湯 治 にお出なさるるか、

^{いせごさんぐう} ^{おり} ^{かなら} ^{かどち}
または伊勢御参宮の折からは、必 ず門 違 いなされますな。

^{のぼり} ^{みぎ} ^{かた} ^{くだ} ^{ひだりがわ}
お 上 ならば右の方、お下りなれば左 側 、

はっぼう ^{やつむね} ^{おもて} ^{みつむねぎょう} ^{どうづく}
八 方 が八 棟、表 が三 ッ 棟 玉 堂 造り。

はふ ^{きく} ^{きり} ^{とう} ^{ごもん} ^{ごしゃめん}
破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて

けいずただ ^{くすり}
系 図 正 しき 薬 でござる。

第二段

いやさいぜん かめい じまん もう ごぞんじ かた
イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、御存知ない方には、

しょうじん こしょう まるの しらかわよふね
正身の胡椒の丸呑み白河夜船。

いちりゅう て きみあい め
さらば一粒たべかけて、その気味合をお目にかけてましよう。

ま こくすり ひとつぶした うえ の
先ず此の薬をかように一粒舌の上に載せまして、

ふくない おさ いや い
腹内へ納めますると、イヤどうも云えぬは、

い しん はい きも すこ
胃・心・肺・肝が健やかになって

くんぶうのんど きた こうちゅうびりょう しょう ごと
薫風咽候より来り、口中微涼を生ずるが如し。

ぎょ ちょう き こ めんるい くいあわ ほかまんびょうそっこう かみ ごと
魚、鳥、木の子・麺類の喰合せ、その外万病速効あること神の如し。

こ くすりだいいち きみょう した まわ こと ぜに はだし に
さて此の薬第一の奇妙には、舌の廻る事が錢ごまが跣足で逃げる。

した まわ だ や たて
ひよっと舌が廻り出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。

第三段

そりやそりやそりや、そりやそりや まわ き まわ く
廻って来たは、廻って来るは、

のど ぜつ げ しおん
あわや咽喉、さたらな舌に、か牙さ歯音。

ふた しん けいちょうかいごうさわ
はまの二つは唇の軽重開合爽やかに、

あかさたなはまやらわ、をこそとのほもよろお。

ひと に ぼん ぼんごめ
一つへぎへぎ二へぎほしはじかみ 盆 盆 米 ぼんごぼう。

つ だて まめ ざんしょ しょしゃざん しゃそうじょう
摘み蓼 つみ豆 つみ山 椒、書 写 山 の 社 僧 正。

こごめ なまが こごめ なまが こごめ なまが
粉米の生 嚙み粉米の生 嚙みこん小米の生 嚙み、

しゆすひじゆす しゆすしゆちん
縹子 緋縹子、ひじゆす 縹子 縹珍、

おや かへいこ かへい おや こ こかへいおやかへい
親も嘉兵衛子も嘉兵衛、親 かへい子かへい、子嘉兵衛の親嘉兵衛。

ふるぐり き きくち
古 栗 の 木 の ふる 切り口。

あまがっぱ ばんがっぱ
雨合 羽か番合 羽か、

きさま きゃはん かわぎゃはん われら ぎゃはん かわぎゃはん
貴様の脚 絆も皮 脚 絆、我等が脚 絆も皮 脚 絆。

かわばかま ぽころ みはりはりなが にぬ ぬ だ
しっ 革 袴 のしっぽころびを、三 針 針 長 にちよと縫うて、縫うてちよとぶん出せ、

かわらなでしこ のぜきちく
河原 撫子、野 石 竹。

によらい によらい み によらいむ によらい
のら 如 来 のら 如 来、三 のら 如 来 六 のら 如 来。

いっすんさき こぼとけ けつまず
一 寸 先 のお小 仏 のお蹴 躓 きやるな。

ほそどぶ りきょう だらなら まながつお しごかんめ
細 溝 にどじよによろり、京 のなま鱈 奈良なま 学 鱈、ちよと四五貫目。

ちやた ちやた た ちやた あおたけちやせん ちや た
お茶 立ちよ茶 立ちよ、ちやつと立ちよ茶 立ちよ、青 竹 茶 筥 でお茶 ちやと立ちよ

第四段

く く なに く こうや やま こぞう
来るは来るは 何 が来る、高野の 山 のおこけら小僧、

たぬきひやつびき はしひやくぜん てんもくひやつぱい ぼうはつびやつぽん
狸 百 匹、箸 百 膳、天目 百 杯、棒 八 百 本。

ぶぐ ばぐ ぶぐ ばぐ みぶぐばぐ あ ぶぐ ばぐ むぶぐばぐ
武具・馬具・武具・馬具・三武具馬具、合わせて武具・馬具・六武具馬具、

きく くり みきくり あ きく くり むきくり
菊、栗、きく、くり、三菊栗、合わせて菊、栗、六菊栗。

むぎ ごみ むぎ ごみ みむぎごみ あ むぎ ごみ むむぎごみ
麦、塵、麦、塵、三麦塵、合わせて麦、塵、六麦塵。

なげし ながなぎなた た ながなぎなた
あの長押の長 薙 刀は、誰が長 薙 刀ぞ。

む ごまがら え ごまがら まごまがら まごまがら
向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、あれこそほんのまの真胡麻殻。

かざぐるま
がらびいがらびい 風 車。

お こほうし お こほうし ゆんべ こぼ またこぼ
起きやがれ小法師、起きやがれ小法師、昨夜も溢して又 溢した。

たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぼ、

ひいだこ お に く
たつぼたつぼ 干 蛸、落ちたら煮めて食おう。

に や く もの
煮ても焼いても喰われぬ物、

ごとくてつきゅう ぐまどうじ
五 徳 鉄 弓 かな熊 童子に、

いしくまいしも とらくまとら
石 熊 石 持ち、虎 熊 虎 ぎす、

なか とうじ らしょうもん いばらぎどうじ ぐりごごう む
中 にも東寺の羅生門には、茨木 童子がうで栗五合つかんでお蒸しやる。

らいこう ひざもとさ
かの頼光の膝元去らず。

第五段

ふな きんかん しいたけ さだ ごだん そばき そうめん うどん ぐどん こしんぼち
鮒・金柑・椎茸・定めて後段な、蕎麦切り素麵、饅頭か愚鈍な子新発知。

こだな こした こおけ こみそ こあ こしゃくしこも こすく こよ
小棚の小下の小桶に、小味噌が小有るぞ、小杓子小持って小掬って小寄せ。

がってん こころえたんぼ かわさき・かながわ・ほどがや・とつか はし い
おっと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行めけば、

やいと す む さんり ふじさわ ひらつか おおいそ
灸を擦り剥く三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、

こいそ しゆく なな お そうてんそうそう そうしゅうおだわら とうちんこう かく ござ
小磯の宿を七つ起きて、早天早々、相州小田原、透頂香、隠れ御座らぬ。

きせんぐんじゅ はな おえど はな
貴賤群衆の、花の御江戸の花ういろ。

あれ はな み おこころ おやわ やい うぶこ はうこ い
アレあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、産子・這子に至るまで、

こ ういろう ごひょうばん ごぞん な もう
此の外郎の御評判、御存じ無いとは申されまいまいつぶり、

つのだ ぼうだ まゆ うす きね すりばち ぐわらぐわらぐわら
角出せ棒出めせぼうぼう眉に、臼、杵、播鉢みばちばち桑原桑原桑原と、

はめ はず こんにちおい いずれもさま あ う
羽目を外して今日御出での何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、

いき ひ ぱ どうほうせかい くすり もとじめ やくしによらい しょうらん
息せい引っ張り、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、

ほほうやま ういろう
ホホ敬って外郎はいらっしゃりませぬか。